

英米文学への誘い^{いざな}

—教職課程における「英米文学概論」—

堀（山口） 緑*

Introduction to English Literature: English Literature Classes in a Teacher Education Course

(HORI Midori)

はじめに

大学で英米文学を教えるとき、「一般的包括的な内容」の授業を、と求められたら担当者はどんな内容を思い浮かべるだろう。英米文学史だろうか。それとも、よく知られた作家・作品を取り上げる授業だろうか。

教職課程の「教科に関する科目」は、「一般的包括的な内容を含むものでなければならない」¹とされている。「一般的包括的な内容」とは、「その科目の学問領域をおおまかに網羅するものであること、特定の領域に偏っていないものであること」²だという。英文科や英米文学コースなどのように英米文学を専攻としている学科・コースの場合なら、当然英米文学関係の授業科目が数多く開講されているので、文学関係の授業をいくつも履修して英米文学全体を「おおまかに網羅して」学ぶことができるかもしれない。だが、英語科や英語コミュニケーション学科など、英米文学以外を専攻する学科やコースの場合、また、国際関係の学部・学科のように、英語を専門としない学部や学科で英語免許が取得できる場合は、そもそも英米文学関係の科目数が多くないことが考えられる。しかも、当然のことながら、英語の教員免許を取得するためには、英米文学の領域だけを学ばよいわけではない。英語学、英米文学、英語コミュニケーション、異文化理解の4分野のそれぞれについて、一般的包括的な内容の科目を含む「教科に関する科目」を1単位以上修得することが必要なのである。現在のコミュニケーション重視の英語教育の流れから言えば、英米文学専攻以外の場合、英米文学よりむしろ英語コミュニケーションや異文化理解の分野を学ぶほうが重要だと考え、英米文学以外の分野に重点を置いたカ

* 近畿大学教職教育部教授

〔キーワード〕 英米文学、教職課程、授業法、映画化された文学作品

リキュラムが組み立てられていることが多いのではないだろうか。また、学生自身が授業を選択する際に、英米文学より英語コミュニケーション関係の授業を数多く履修しようとする考えもあるだろう。そのなかで、授業担当者は、どのようにしたら「一般的包括的な内容」の英米文学の授業を提供できるのだろうか。

筆者は、近畿大学で、英語の教員免許取得を希望する法学部と経済学部の学生対象の「英米文学概論Ⅰ」「英米文学概論Ⅱ」という2科目を担当してきた。法学部と経済学部を対象とする英語の教員免許取得のためのカリキュラムのなかで、英米文学に関する授業は、この「英米文学概論Ⅰ」「英米文学概論Ⅱ」に加えて「英米文学研究A」「英米文学研究B」の計4科目である。「英米文学概論Ⅰ」「英米文学概論Ⅱ」のふたつが必修科目、「英米文学研究A」「英米文学研究B」は選択科目なのだが、残念ながら、選択科目を履修する学生は多いとは言えない。英語の教員免許を希望する学生が全員履修するのは「英米文学概論Ⅰ」「英米文学概論Ⅱ」の2科目のみである。半期科目二つで、どうすれば「一般的包括的な内容」に少しでも近づけることができるだろうと、筆者は学生の反応を見ながら長年試行錯誤してきた。この経験を踏まえながら、本論では特に「英米文学概論Ⅰ」を中心に、改めて「一般的包括的な内容」の英米文学の授業について考えてみたい。

1. 教職課程の英米文学

上述のように、英語の教職課程では、英米文学の単位を少なくとも1単位以上修得することが必要なのだが、まず、教職課程で英米文学を学ぶ目的を再確認しておきたい。英語の教職課程で、わずかでも英米文学を学ぶことが必須とされているのはなぜなのだろうか。

それはまず何より、英語教員の一般常識として、ある程度の英米文学の知識は持っておいてほしい、ということではないだろうか。また、文学はその国が生んだ文化だから、ということも言えるだろう。文学を通して、わたしたちはその国の人々の考え方や物の見方、暮らし方などに触れることができる。Joanne Collie と Stephen Slater は文学を語学教材として使う利点について以下のように述べているが、この言葉は英語教員を目指す学生が英米文学を学ぶ場合にも当てはまると思われる。

It is true of course that the ‘world’ of a novel, play, or short story is a created one, yet it offers a full and vivid context in which characters from many social

backgrounds can be depicted. A reader can discover their thoughts, feelings, customs, possessions; what they buy, believe in, fear, enjoy; how they speak and behave behind closed doors. This vivid imagined world can quickly give the foreign reader a feel for the codes and preoccupations that structure a real society.³

文学のなかに描かれているのは確かに虚構の世界ではあるが、そこには舞台となっている社会のさまざまな背景が描かれている。その言語を使っている人々がどう考え、どう行動するか。その社会にはどんな習慣、慣習があるのか。わたしたちは、文学を通して、その言語を使っている文化について多くを学ぶことができるのだ。

現行の中学校学習指導要領解説には、外国語科の指導について念頭に置くべき項目の一つめとして、「①外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める」⁴ことが挙げられている。このような指導を可能にするために、英語の教職課程では英米文学を学ぶことが必要とされていると言えるだろう。また、教職課程の「教科に関する科目」に求められているように、英米文学を「おおまかに網羅する」ためには古典にも触れる必要があるが、古典を通してその国の歴史的背景も学ぶこともできよう。教職課程で英米文学を学ぶのは、特定のある時代の文学や、ある作家の作品を研究するためではなく、文化的、歴史的背景を学び、言語や文化に対する理解を深め、英語に関する教養を身につけるためなのだ。だからこそ、幅広く一般的な内容を学ぶ科目が必要とされているのだろう。そのことを、まずここで再確認しておきたい。

2. 学生と英米文学

筆者は「英米文学概論Ⅰ」の第1回の授業で、「英米文学について知っていること」や「いままでに読んだことのある作品」について学生に書いてもらうことにしている。上述したように、筆者が担当する科目は英語の教員免許取得を希望する法学部と経済学部の学生が対象であるため、学生たちは英米文学を専攻しているわけではない。皆、まず困った顔をする。そこで、なるべく書きやすいように、英米文学かどうかははっきりわからなくてもよいし、映画でもいい、タイトルだけ知っているなどでもよい、と声をかける。その結果、2015年4月の最初の授業に出席した14名の学生のうち、一部でも読んだことがある作品を挙げたのは3名だけだった。2名がハリー・ポッターシリーズの一部を挙げ、もう1名は『指輪物語』を挙げた。2016年4月

は、やはり第1回に出席した13名の学生のうち、1名が『白鯨』の名を挙げ、話を少し知っている、と書いている。また、そのほかに1名がアガサ・クリスティの伝記を読んだことがあると答え、3名がシェイクスピアの名前を知っていると答えた。2015年、2016年とも、それ以外は「何も知りません」「本はあまり読まない」「接する機会がない」というような答えが並んでいる。例年、こういう状況である。「接する機会がない」というのは学生の正直な気持ちであろう。読書の経験も少なく、ゲームなどのように、ほかに興味を引かれるものがいくらでもある学生たちにとって、外国の文学など縁遠い存在なのは当然だ。だが、授業担当者としては、学生たちに少しでも授業内容に関心を持ってもらわねばならない。このように英米文学についての予備知識をほとんど持たず、英米文学とは縁遠いと感じている学生たちに、どうすれば関心を持たせることができるのだろうか。

筆者は、いままでの経験のなかで、一部の文学的教材が学生に好評だと感じていた。それは、学生たちが知っている単語の語源になっている神話や、学生たちが親しんでいるゲームのなかに名前だけ出てくる伝説や、学生たちが名前だけは知っている『ロミオとジュリエット』などである。どれも、学生たちが何らかの形で名前だけはすでに「知っている」というのが共通項だった。やはり、自分とは関わりのないものと思っている状態では親しみは持ちにくい。関心を持たせるにはまず、英米文学は難しく、自分とは関わりがないものだという意識を取り除き、実は意外と身近な部分もあるのだ、と学生たちに実感させることが大切なのではないだろうか。その実感があれば、文学に対する関心を呼び起こすことができるかもしれない。この点については、フランス文学と英米文学の違いはあるものの、「フランス文学概論」を担当する瓜生濃世が次のように述べている。「作品が受講生と全く無関係なものではないと説得し、この作品があなた自身とつながることが必ずある、というメッセージを強く打ち出す必要があるのだ」⁵⁾。瓜生はこう考えて「恋愛」をテーマとしたインタラクティブな授業を構築していくが、筆者は英米文学を「おおまかに網羅」するためにも、文学史を意識しながら授業計画を見直すことにした。

まず英米文学に親しみを持たせ、文学的なものを楽しんでもらうこと。それまでは文学史を扱ったテキストを用い、その合間の息抜きのように神話や伝説を取り上げていたのだが、見直し後は最初の数回を「英米文学の基礎知識」と題し、神話や伝説など、学生たちが親しみを感ずる可能性が高い事項を取り上げることとした。また、英米文学を知るきっかけ作りとして、文学作品の映画化されたものが役立つと考え、できるかぎり関連する映画を紹介することにし

た。映画化されている、ということは、現代でもその作品を知っている人、興味を持っている人が多いということであるし、学生にとってみれば、それだけ評価されている有名な作品なのだ、と感じられるだろう。しかも、それぞれの時代の暮らしぶりや町並み、その当時の服装などは、文章で読むより、映像で見たほうが圧倒的に理解しやすい。もちろん、映画化された作品は原作と違う部分も多く、時代設定が変更されている場合もあって、取り上げ方には注意が必要である。だが、変更点を比較するなど、違いを意識することでかえって理解が深まることもあると考えられる。

3. 実際の授業内容

筆者が担当する「英米文学概論Ⅰ」は、前述のように、英語の教員免許取得を目指す法学部と経済学部の2年生以上を対象とした必修科目である。履修者が英語を専攻としていないため、英文科や英語科などの学生に比べて英米文学関係の知識が乏しい可能性は大きいと言える。だからこそ、いっそう授業内容の工夫が必要だと考え、以下の5点を心がけた。

- ①英米文学への入り口として神話や伝説など、学生が親しみやすい内容に触れる。
- ②歴史的な知識も乏しいと思われるので、文学史の流れにそって年代順に項目を取り上げるとともに、時代背景の説明を補う。
- ③できるだけ関連映画を紹介する。
- ④英語の授業でもあるので、英文読解も取り入れるが、原文読解は最低限にとどめる。
- ⑤グループ活動を取り入れる。

①から③については、すでに述べた通りである。④については、原文読解に時間をかける余裕がないためである。また、⑤については、講義ばかりにならないよう、英文読解などの作業を取り入れるようにした。その際、グループ活動を取り入れると、学生同士の交流が深まるとともに、グループでの教え合いによって読解に必要な時間を短縮することができた。また、グループ内で感想を話し合うなどして文学を楽しむ雰囲気を作ってほしいと考えた。

(1) 「英米文学概論Ⅰ」の流れ

「英米文学概論Ⅰ」の具体的な内容については、毎年多少の変動はあるものの、おおよそ以

下の通りである。

・第1回 (オリエンテーションを含む) 英米文学の基礎知識

授業内容のオリエンテーションののち、英米文学について知っていることを書いてもらう。ギリシャ神話から、エコーとナルキッソスの話の前半をグループで英文読解する。

・第2回 英米文学の基礎知識

エコーとナルキッソスの話の後半をグループで読み、この神話が語源となっている言葉を考える。映画『パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々』(2010)の冒頭部分を視聴して原作がアメリカのヤングアダルト向けの小説であることを紹介し、主なギリシャ神話の神々について調べることに、神話に起源を持つ言葉などをほかにも探すことを課題とする。

・第3回 古英語の時代

第2回の課題発表を行う。その後、叙事詩という形式について触れながら英文学史の内容にはいり、イギリス最古の叙事詩として『ベオウルフ』を紹介する。なぜ、舞台が北欧なのかを考え、時代背景を説明し、古英語について説明する。映画『ベオウルフ―呪われし勇者』(2007)の冒頭を紹介する。

・第4回 古英語から中英語へ

この回は、英語史の内容を含む。古英語から中英語への移り変わりについて説明し、チャーサーを紹介する。チャーサーについて書かれた英文を読むなどの作業を行う。また、代表作『カンタベリー物語』の内容を紹介する。

・第5回 アーサー王伝説

イギリスでの印刷所開設に触れる。キャクストンによって印刷された本のひとつとしてトマス・マロリーの『アーサー王の死』を挙げ、アーサー王伝説を簡単に紹介する。また、アーサー王伝説の一部をグループで英文読解する。

・第6回 アーサー王伝説

前回に続き、アーサー王伝説の一部をグループで読解する。読解部分に該当する場面を、映画『エクスカリバー』(1981)で視聴する。

・第7回 シェイクスピアの時代

シェイクスピアの登場に向けて、英語の移り変わりや時代背景に触れる。エリザベス一世について説明し、当時の演劇事情について書かれた英文などを速読する。映画『エリザベス・ゴールデンエイジ』(2007)の一部を視聴する。

・第8回 シェイクスピア

シェイクスピアについて紹介し、映画『恋に落ちたシェイクスピア』(1998)の一部を視聴しながら、当時の劇場、演劇事情などについて説明する。シェイクスピアの有名な作品をいくつか取り上げ、簡単に内容紹介する。

・第9回 シェイクスピア

『ロミオとジュリエット』のバルコニーの場のセリフの一部を読む。ここは原文を用い、シェイクスピア時代の英語にも触れる。その後、映画『ロミオとジュリエット』(1968)で、そのセリフの部分がどのように演じられているかを確認する。また、映画『ロミオ+ジュリエット』(1996)の同じ部分との比較、さらに日本で演じられた舞台版の『ロミオとジュリエット』とも比較を行う。

・第10回 小説の誕生

時代背景と当時の小説の特徴について説明する。『ロビンソン・クルーソー』の粗筋と作者デフォーを紹介する。そのほかの初期のイギリスの小説家も簡単に紹介する。

・第11回 小説の発展～英詩を楽しむ

その後のイギリス小説の発展に触れながら、何人かの作家を紹介する。後半は英語の詩の韻やリズムについて簡単に説明し、マザーグースの有名なものをいくつか英語で読み、CDで朗読を聞く。さらに、実際に声に出して読んでみる。

・第12回 英詩を楽しむ

前回の内容を踏まえて、ロマン派の詩人による詩を読む。ワーズワースの詩を中心に、英語で読み、CDで朗読を聞く。さらに、ロマン派を紹介した資料ビデオなどを視聴する。

・第13回 アメリカ文学の起こり

時代背景を説明し、ホーソン、ポー、メルヴィルなどを紹介する。映画化されている作品の一部を視聴する。

・第14回～第15回 イギリス文学とアメリカ文学のその後、総まとめ

1800年代後半から1900年代にかけての英米文学を概観するとともに、最後のまとめとして半期の内容の総復習を行う。

(2) 各回の詳細

「英米文学概論Ⅰ」はだいたいこのような流れなのだが、毎回の内容について、もう少し詳

しく述べてみたい。

第1、2回ではギリシャ・ローマ神話を取り上げている。英米文学とは言えないが、神話を読み、その神話が自分たちの知っている言葉（ナルシスト、ナルシズムなど）の語源になっていると知ると、学生たちの反応が変わるように思われる。この神話をすでに知っている学生がいる場合もあるが、ほとんどの学生は知らないようだ。最初、文学など自分には無縁だと思っている学生たちも、意外と身近なところに文学的なものが関係しており、自分もその一部を知っているのだ、と気づくと、ほかにも同様のケースがあるのだろうかに興味を持つようだ。そして、神話に由来する言葉やエピソードなどをほかにも探してくるように、という課題に熱心に取り組んでくる。惑星の英語名や星座にまつわる話はもちろん、スポーツ関連企業のナイキの社名がギリシャ神話の勝利の女神ニケの名に由来することや、コーヒーチェーン店のスターバックスのロゴがギリシャ神話のセイレンにちなんでいることなどを調べてくる学生もいる。調べることは簡単なのだが、文学的なものに対する学生たちの意識が少し変化するので実感できるので、ギリシャ・ローマ神話を毎年最初に取り入れるようにしている。

第3回後半からは英文学史にはいる。古英語の時代は英語史や世界史に関連する知識も必要なので、どうしても教員による説明が多くなり、苦勞する部分だ。映画化された『ベオウルフ—呪われし勇者』（2007）を紹介するなどして、少しでも学生たちの興味をつなぎ止めようと努力している。映画のDVDには監督や脚本家による、原作と映画の違いを扱った特典映像が収録されており、参考資料としても役立つ。⁶

第4回から第6回までは中英語の時代となる。やはり英語の変化や時代背景などを説明しなければならないが、映像資料があまり手に入らず、ここも苦勞する部分である。だが、中世の写本を写真で紹介すると、その美しさや緻密さには関心を持ってくれるようだ。チャーサーについては、資料を読み、『カンタベリー物語』の内容や構成について紹介するにとどめている。ところがその後、イギリスに印刷所ができて本が出版されるようになることと関連して、トマス・マロリーの『アーサー王の死』を紹介し、アーサー王伝説の一部を読む段階になると、一転して学生たちがとても楽しそうに取り組むのが印象的である。アーサー王伝説については、エクスカリバーなどの名称がゲームに使われていて知っている、あるいは、ディズニー映画で名前は知っているという学生がかなりいるためであろう。

第7回から第9回まではシェイクスピアを取り上げる。シェイクスピアに関しては関連映画や教材も多く、様々な素材が利用できる。筆者は、関連映画として『エリザベス・ゴールデン

エイジ』(2007)、『恋に落ちたシェイクスピア』(1998)を使用し、前者は時代背景の説明に、後者は当時の劇場の様子説明に利用している。また、有名なセリフの一部を読んでから、映画『ロミオとジュリエット』(1968)の当該部分を視聴するが、セリフが理解できるため、学生たちの反応もよい。さらに、同じ部分をレオナルド・デカプリオがロミオを演じた『ロミオ + ジュリエット』(1996)でも見てみる。この映画は設定が現代に置き換えられており、バルコニーの場も舞台となるのはプールや監視カメラのある住宅なのだが、セリフは現代英語ではなく元のままで、そのことにも気付いてもらう。さらに、蜷川幸雄演出、藤原竜也によるロミオ、鈴木杏によるジュリエットの舞台のDVD『ロミオとジュリエット』(2005)を用いて、学生たちも知っている俳優が演じている日本での舞台の該当部分も見せる。日本でも日本人によって上演されていること、日本にもシェイクスピア劇を見に行く観客がいること、を知ってもらいたいからである。また、英語のセリフと比較して、日本語のセリフがどのように聞こえるかも知ってもらいたいと考えている。日本の俳優が演じているのを見ると、学生たちはその作品そのものにも親近感を持つようである。

第10回はジャーナリズムの発達や小説の誕生に触れ、『ロビンソン・クルーソー』を取り上げるが、映画化された回数が少ないため映画の紹介がしにくく、ここも苦勞する部分である。また、子ども時代に少年少女向けの『ロビンソン・クルーソー』を読んだことがある、という学生がかなりいた頃もあったが、最近はそのような学生はほとんどいなくなっている。

第11、12回は英詩を取り上げている。どの段階で英詩を取り上げるか悩んだのだが、英文学史の流れを18世紀まで追ったところで、ロマン派の紹介とともに英詩の基本的な読み方を取り上げることにした。まず学生になじみのあるマザーグースをいくつか紹介し、頭韻、脚韻などの説明を行う。その後ロマン派の詩をいくつか原文で読み、鑑賞する。ここ数年は、ワーズワースの水仙の詩を取り上げている。

第13回では、アメリカ文学の起こりから発展を扱い、アメリカン・ルネサンスの作家として、ポーやホーソン、メルヴィルを紹介する。意外に映画化も多くなか、『白鯨』(1956)なども一部を見ただけでは全体像を理解しにくいいため、学生たちに興味を持たせるのが難しいところである。

第14、15回はまとめとして、その後の英米文学の流れに簡単に触れることにしている。文学史関係の年表などを参考にしながら、有名な作家・作品とともに、個人的に好きな作品や思い出のある作品を紹介している。

(3) 今後に向けて

こうして振り返ってみると、まず英米文学に親しみを持ってもらうこと、文学的なものを楽しんでもらうことに重点を置いているため、英米文学史の授業としては、抜け落ちている部分、駆け足となってしまいう部分も多く、一般的な内容とはかなり違うかもしれない。また、英米文学と言いながら、アメリカ文学に触れる余裕もわずかしかない。それでもまだ、各回の詳細に書いた通り、学生に興味を持たせるのが難しいと感じる部分は多い。その部分をどう補い、さらに親しみやすい内容にしていくかが今後の課題である。ただ、英文学史の授業というのは、たとえ英文科であっても難しいものようだ。渡辺利雄が文学史の授業について、「『基本的な事実』だけでは単調になるし、特殊講義風に少し掘り下げて論じると時間不足になる。結局は中途半端な授業に終わってしまう」⁷と述べているのを読むと、学生に興味を持たせようとするには、やはりある程度ポイントを絞らざるを得ないのだと痛感する。

ただ、課題はまだまだあるものの、学生たちはこの授業を通して英米文学をある程度楽しんでくれたようだ。2015年前期、2016年前期の「英米文学概論Ⅰ」の授業評価アンケートでの、「この教員の授業を10点法で評価してください」という質問項目の平均値は、2015年の2クラスが9.0と9.6、2016年の2クラスが9.2と8.4だった。少人数クラスだということを考慮しても、全体として好評だと言えるだろう。コメント欄には、映像、映画を使っていることを評価する声が多かった。また、2、3人ではあるが、文学に興味を沸かした、英文学に興味を持つようになった、という声もあった。

4. 結びにかえて

脇明子は、読書することの意味について悩むようになったきっかけについて、次のように述べている。

いま教えている女子大学へ来て何年かたつうちに、『本が嫌いなのはあたりまえ』『読まないのがふつう』という学生たちが、目立って増えてきたからです……しかし、彼女たちの多くは、小学校や幼稚園の先生をめざしている人たちであり、その彼女たちが将来かわる子どもたちはどうなるのだろうと考えると、これは放っておくわけにはいかないという気がしたのです。⁸

中学校、高等学校の教員を目指す学生の場合でも、同じことが言えるのではないだろうか。教職課程で英米文学を学ぶのは、一般常識のため、また、文化的、歴史的背景を学び、言語や文化に対する理解を深め、英語に関する教養を身につけるためかもしれないが、それ以前に、学生たちには文学的なものにも親しんでほしいと思う。また、授業を通して本を読む楽しみを伝えたいと思う。文学というのも結構楽しいんだよ、と伝えたい。これは教職課程を履修する学生に限ったことではないが、脇が言うように、特に教員を目指す学生にはその楽しさを伝えたい。教師が読書を楽しんでいれば、その姿勢は自ずと生徒にも伝わると思うからである。

教職課程の英米文学の授業の場合も、「一般的包括的な内容」を「おおまかに網羅する」ということにこだわりすぎると、ともすれば知識の詰め込みになってしまい、それでは文学の楽しさは伝わらないのではないだろうか。確かに知識を身につけることも大切ではあるが、作家名や作品名を知っていても、その作品の内容を知らないのではあまり意味がない。英米文学に関しては、知識を身につけるよりむしろ、英米文学への好奇心をかき立てることのほうが大切なのではないだろうか。縁遠いものだと思っていたが、意外とおもしろそうだから一冊読んでみようか、と学生に思わせ、文学への入り口に誘うこと。それこそが、最終的には「一般的包括的な内容」につながるのではないかと筆者は考える。そもそも、英米文学を2、3の授業で網羅することなどできないのだ。いったん英米文学に興味を持った学生は、自分で本を読みながら、英米文学に関する知識を深めていくことができるだろう。

ある程度の一般的な知識は身につけながら、英米文学を楽しんでもらえる授業。英米文学って意外と親しみやすいものかもしれないと思わせる授業。何か一冊、実際に読んでみようかと思わせる授業。そういう教職課程の英米文学の授業をこれからも目指していきたい。

【注】

- 1 文部科学省「教育職員免許法施行規則 第一章第四条備考一」2017年5月15日閲覧
(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1268593.htm)
- 2 文部科学省「教職課程認定審査の確認事項 2-(1)」2017年5月15日閲覧
(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1268587.htm)
- 3 Joanne Collie and Stephen Slater, *Literature in the Language Classroom: A resource book of ideas and activities* (New York: Cambridge University Press, 1987), p. 4.
- 4 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』(東京:開隆堂出版株式会社, 2008),

p. 6.

- 5 瓜生濃世「学習者の関心を呼び起こす取り組み—『フランス文学概論』の場合—」『京都産業大学論集 人文科学系列』第46号 (2013), p. 52.
- 6 「原作から映画へ」『ベオウルフ／呪われし勇者 劇場版』監督ロバート・ゼメキス. 2007. DVD. ワーナー・ブラザーズ, 2008. 「原作から映画へ」は Disc 2 に収録されている映像特典である。
- 7 渡辺利雄『英語を学ぶ大学生と教える教師に—これでいいのか？英語教育と文学研究』(東京：研究社, 2001), p. 202.
- 8 脇明子『読む力は生きる力』(東京：岩波書店, 2005), p. v.